

カール・R・ポパー著『開かれた社会とその敵』(未来社、1980年)

序文(17~20頁)

●本書が素描するのはわれわれの文明—おそらくは人間らしさと合理性、平等と自由を目指すものとして

記述してよい文明—が直面している幾つかの困難

①本書はこの文明が誕生—呪術的な力への服従を伴う部族的ないし「閉ざされた社会」から人間の批判

力を解放する「開かれた社会」への移行—の衝撃からまだ十分に回復していないことを示そうとする

②本書は更に、科学の批判的で合理的な方法を開かれた社会の諸問題に対して応用することを検討しよ

うとする「ピースミール社会工学」(民主的な社会改造の諸原則)⇔ユートピア社会工学

⇔最も有力なもの—歴史信仰

・社会科学の方法—歴史予言というものは全く科学的方法の領分を超えている

・科学的予測と歴史予言の区別の無視に基づくもの

●本書はこの予言的な知恵が有害であり、歴史の形而上学は科学のピースミールな方法を社会改革の

問題に応用することの妨げになるということを示そうとする。更にまた、われわれが運命の予言者のよう

な態度をとるのをやめたときに、われわれは自分の運命の作り手になれるかもしれないということを示そ

うとする

流行る理由—われわれ[知識人]の道徳的理想や完全性の夢といったものに合致する生活をせず、また合

致する生活をしえない世間に対する根深い不満をそれらが表現している、ということ

第一部 プラトンの呪文

第一章 歴史信仰と運命の神話

歴史信仰 政治に対する真に科学的ないし哲学的な態度、また社会生活一般のより深い理解といったも

のは、人間の歴史についての冥想と解釈に基づかなければならないという信念が広く行き渡

っている。…彼[社会学者ないし社会哲学者]は歴史の舞台の上で演じられる演劇の意味、

すなわち歴史発展の諸法則を理解しようと努めるだろう。もし彼がこのことに成功するならば、

もちろん彼は未来の展開を予測できるであろう。そうすれば彼は政治を堅固な土台の上に置

き、どのような政治的行為は成功の見込みがありどれが失敗しそうかを告げることによつて、

われわれに実践的な助言を与えることができるであろう

通常は当然のこととして認められ、ほとんど疑われることさえなくなった一つの古い観念、あるいはむしろ

ゆるく結びついた一連の観念群

ex.人種主義ないしファシズムの歴史哲学(右派)/マルクス主義の歴史哲学(左派)

→どちらの理論も、自分たちの歴史予言を、歴史発展の法則の発見へと導くようなある歴史解釈に基づか

せている(28頁)

第二章 ヘラクレイトス

○ヘラクレイトスは変化の観念を発見した哲学者(30頁)

●歴史信仰一般の重要な特徴—変化、とりわけ社会生活における変化の強調

①事物が、そして王たちでさえも変わるものだということは、とりわけ自分たちの社会環境を当り前のもの

とと思っている人たちに対して印象づける必要のある真理である—認めるべき

②変化を過度に強調し、またそれを補足する冷徹で不変な運命法則への信仰を伴う、という特徴が見られ

る(32頁)

・ヘラクレス哲学の一般的特徴—普遍的な変化と隠れた運命 ex.一者と万物

→この哲学からは、すべての変化の背後にあってそれを駆り立てる力が存在するという理論が出てくるが、

その理論は、「社会静態学」に対するものとしての「社会動態学」の重要性を強調することによって、歴史

信仰的性格が顕わになる(34頁)

・社会的大変動の時代には、歴史信仰的な諸思想は容易に優勢になるかのように思われる

第三章 プラトンの形相ないしイデアの説

・プラトンの歴史展開の法則 すべての社会的変化は堕落ないし腐敗ないし退化

→宇宙法則、流転するすべての事物、生成するすべての事物は腐敗する運命にある(37頁)

○プラトンとヘラクレイトスの重要な相違

・プラトンは歴史的運命の法則、すなわち腐敗の法則は、人間理性の力に支えられた道徳意志によって

破ることができるものと信じた

●彼が、堕落へ向かう歴史の一般的傾向、およびすべての政治的变化を阻止することによって政治的領域

における一層の堕落を止めうる可能性を共に信じたことは確か

→すべての政治的变化を阻止することが彼の努力目標

「最善の、完全な国家」=押さえつけられた国家(38頁)

●多くの歴史信仰者の特徴—変化が不変の法則に支配されるという見解に固執する

→プラトンはあらゆる種類の通常の事物、つまり腐敗する事物には、腐敗しない完全な事物がそれぞれ対

応するものと信じた。完全で不変の事物へのこの信念は普通形相ないしイデアの説と呼ばれるが、これ

が彼の哲学の中心的教説になった

○社会工学の態度(⇔歴史信仰)

→社会工学者は政治の科学的基礎を社会技術のようなものとする

●歴史信仰と社会工学という二つの態度は、ときとして典型的に結びついた形で現れる ex.プラトン

●プラトンの政治目的

①社会革命や歴史的腐敗ということに現われるヘラクレイトス的流転を避ける

②①が非常に完全で歴史的展開という一般的趨勢に関わりをもたない国家を建設することによって可能

③自分の完全国家のモデルないし原型が歴史の始まりのときに存在した黄金時代において見出される

●形相ないしイデアの説 三つの異なった機能(41頁)

第一の問題、プラトンの方法論 第三章

第二の問題、変化の理論と歴史の理論 第四、五章

第三の問題、社会変化の阻止 第六～九章(47頁)

○方法論の本質主義 科学の目的が本質を暴きそれを定義という手段によって記述することにある

●自分のプラトン論を、彼の歴史信仰および「最善国家」に限定している。歴史信仰に対する私の態度は

明白な敵意の態度であり、それは歴史信仰が無益であり、またそれ以上に、悪いものだという確信に

基づいている(49頁)

第四章 変化と静止

・プラトンの社会学は、思弁と事実についての鋭い観察を巧妙に融合

「枠組みは、形相の理論、普遍的な流転と腐敗の理論、生成と退化の理論」

・社会展開

「完全国家→名誉制→寡頭制→民主制→僭主制」

●プラトン社会学の根本法則

経済的な階級利害の背反によって助長された内部分裂や階級戦争がすべての政治革命の駆動力で

ある→古代の部族的形態の社会生活を再構成しようとする真剣な試み(60頁)

・階級戦争の回避という問題は、階級を廃止することによってではなく、支配階級に対して挑むことが

できないほどの優位を与えることによって解決(62頁)

●支配階級の内部の分裂に対しては、支配カーストの共産制(64頁)

・主人階級の統制のための唯一の容認できる方法—自己規制

・支配階級の育種と教育—支配階級の道具

⇒困難—荒々しい+温和でもなければならぬ(66頁)

第五章 自然と規約

●「閉ざされた社会」が崩壊→「自然」と「社会」の相違についての理論的理解が展開できる

・(a)自然法則/(b)規範法則の区別(71頁)

●出発点「素朴一元論」「閉ざされた社会」特徴/自然法則と規範法則の区別がなされていない段階

・素朴自然主義

・素朴規約主義

最終段階「批判的二元論」「開かれた社会」特徴/区分が明瞭に理解される

・批判的二元論が主張するのは、規範や規範法則は人間が作り、また変えることができる

→われわれは現存する規範法則を実現する価値があると決定した何らかの標準的な規範と比較できる

・これらの決定は事実に関わるが、決して事実から導出できるものではない(74頁)

●批判的二元論は決定ないし規範を事実に戻元することの不可能性を強調、事実と決定の二元論
* 道徳的決定がわれわれに依存するという見解がそれらは全く恣意的であるということを含意するもので

はない

◎私は示唆されたある道徳法則を採用したり拒絶したりすることに対して責任があるのはわれわれであり

、またわれわれのみであること、真の予言者と偽の予言者を区別しなければならないのはわれわれであ

ることを主張するだけ(78頁)

・社会学法則は社会制度の機能と関連

→制度の中では規範法則と社会学法則すなわち自然法則がきめ細かに織り合わされており、それゆえこ

れら二つのものを識別できなければ制度の働きを理解することは不可能(80頁)

○中間段階(1)生物学的自然主義(2)倫理的・法的実定主義(3)心理学的・精神的自然主義(81頁)

●批判的二元論を採用する過程に立ちふさがる二つの主要な傾向

1、規範を事実に戻元しようとする傾向

2、われわれの倫理的決定の責任は全くわれわれにあり、誰か他のもの、神や自然や社会や歴史等に

転嫁することはできないということ自ら確認することへの恐れに基づく(85頁)

●プラトンの「自然」=「本質」

プラトンは、その内在的価値を強調したい事物をすべて、人工物に対するものとして自然物であると主張

→魂はすべての物質的なものに先立つ

・事物の本質とはその起源→歴史信仰の方法論

社会契約=自然な規約←人間の社会的本性というものは個人の不完全性にその起源をもつ(87頁)

- 国家は個人よりも上位に置かれなければならない
- 個体が全体に奉仕することは「自然」であり、全体は単なる個体の寄せ集めではなく、高次の「自然な」単位なのである—「全体論」
- 十分に完全な国家でさえも腐敗の法則を免れることができない理由
不毛や退化に対して、育種の必要⇔しかし理性的知識ではなく、経験的知識にすぎない(92頁)

第六章 全体主義での正義

- プラトンの基本的要求
 - ①変化と静止についての彼の観念論的な理論に対応する定式 すべての政治変化を阻止せよ！
 - ②彼の自然主義に対応する定式 いかんにして実行可能か 自然へ帰れ！
 ここから引き出せる
 - プラトンの政治綱領
 - (A)階級間の厳格な区分
 - (B)国家の運命と支配階級のそれとの同一視
 - (C)支配階級は軍事力や軍事訓練といったものを独占し、武器を携行したり各種の教育を受ける権利を独占する。だが経済活動、とりわけ金儲けに関与することは許されない
 - (D)支配階級のすべての知的活動の検閲、および彼らの心を型にはめ込み統一することを目指す継続的な宣伝がなければならない
 - (E)国家は自己充足的でなければならない
- ◎彼の政治的要求は純然たる全体主義的かつ反人道主義的要求(99頁)
- プラトン「正義」:「最善国家のためになるもの」=厳格な階級区分と階級支配の維持によってすべての変化を阻止すること
 - ex.「支配者が支配し、労働者が労働し、また奴隷が奴隷として働く場合に、国家は正義である」
 - ◎「正義」:われわれ、個人の扱いにおける何らかの種類の平等
:プラトン、諸階級間の関係に基づく国家全体の特性(100頁)
 時代性？
 - プラトンが彼の全体主義的階級支配を「正義」として提示しようと試みたが、[当時の]人々は一般的に「正義」という言葉で全く反対のことを意味していた、われわれの用法と似ている(102頁)- 正義は法の前での平等であるという見解には決して触れない(103頁)
 - プラトンの正義論 (a)'自然的特権の原則
 - (b)'全体論ないし集団主義という一般原則
 - (c)'国家の安定を維持し強化することが個人の任務であり目的であるべきだとす
- る原則(104頁)
 - ・生まれつきの指導者のための生まれつきの特権を主張
 - ←三つの論法 ①「自分自身の仕事を心にかけること」という徳が「正義」であるに違いない
 - ②自分自身の持ち場を守ること、すなわち自分自身の階級ないしカーストでの持ち場を守ることが正義である(106頁)
 - ③全体論ないし集団主義の原則への訴え 国家の安定の維持=個人の目的
- 個人主義—集団主義、利己主義—利他主義
 - プラトンは四つの可能性ではなく、二つの可能性しか認めない
(すべての利他主義=集団主義、すべての個人主義=利己主義)
 - ・プラトンは個人主義を利己主義と同一視することによって、集団主義擁護と個人主義攻撃のための強力な武器を手にするようになる
 - ⇔個人主義は利他主義と結合された形で、われわれの西洋文明の土台となった
 - *プラトンの個人に対するその真に驚くべき敵意はあまりにも認識されることが少ない(111頁)
 - プラトンは都市を害する恐れのあるものは道徳的に邪悪であり不正であると絶えず繰り返す

→プラトンが国家の利害という唯一の究極的な基準しか認めない(115頁)

・『ゴルギアス』ソクラテスの影響下、全体主義理論を展開していなかった⇔『国家』(123頁)

●この議論は、正義とは自分の国家ないし階級ないし党派の力のために役立つものだという現代の全体

主義の定義にあまりにも酷似している(125頁)

第七章 指導者の原則

○プラトン政治哲学の中で知恵の観念が果たす役割

●「誰が国家を支配すべきか」→「最も善良な者」など 無益

⇔私の念頭にある理論は、多数派支配が本来良いとか正当であるという教説から出発するのではなく、

むしろ専制政治が悪いということから出発(129頁)

・「民主制」→流血なしに排除できる政府からなる

・「専制政治」「独裁制」→被支配者が革命成功の場合を除いては排除できない政府からなる

●制度はうまく設計されるとともにうまく人員配置されなければならない→人物の要素/制度の要素を区

別

→事態を改善するのはわれわれである。民主的制度が自らを改善することはできない。制度を改善すると

いう問題は常に、制度にとっての問題ではなく人物にとっての問題(131頁)

・現在の問題が大幅に人物の問題であるのに対して、未来の建設は必然的に制度的なもの

ex.未来の指導者の問題

第八章 哲学者王

・プラトンは彼の政治的使命を社会という病める身体を治療し救済する使命として具象化したがついて

いる
→哲学者王は哲学者としては真理の愛好者であるが、王としては「非常に多くのうそや欺瞞を行なう」決

意がなければならない

●プラトンの功利的で全体主義的な原則があらゆるものを圧倒し、真実を知りまた真実を告げられるよう

要求するという支配者の特権さえも屈服させる→すべての政治的変化を阻止するという希望(142頁)

●プラトンが要求するのは学識ある者(哲学者)の支配(146頁)

→機能①国家の創建に関わるもの 都市創建者ないし立法者の機能

プラトンは哲学者という言葉に、形相ないしイデアの神的世界を愛し、また見る者という新しい意味

を与える 都市の神聖な原型を写す

②国家の維持に関わるもの 主人階級の育成 教育/優生学的育種の監督を区別

教育 支配者の権威を極度に増大させる必要→支配者たちに目印をつけ、支配者と被支配者の

の

境界を作り上げる(149頁)

人種主義 人間の神聖な原型をも写す(151頁)

→哲学者の主権の要求だけが社会生活の諸悪[政治的不安定、種族的退化]に終止符を打つことができ

る(152頁)

●哲学者王とはプラトン自身である(154頁)→哲学者王の主権の背後には権力の追求がある(155頁)

第九章 唯美主義、完全主義、ユートピア主義

●ユートピア社会工学

・ユートピア的態度は、徹底的な歴史信仰への明白な代案、過激性の少ない歴史信仰の補完物

→合理的な行為はどれも、一定の目標を持つ→理想国家(157頁)

⇔ピースミール社会工学

・社会の最大の究極的善を探してその獲得のために闘うよりも、社会の最大で最も緊急な悪を探してそ

れと闘うという方法を採用(158頁)

→最大の実践的難問、すなわち計画の実行に当たって激情や暴力の代わりに理性を用いるという難問

をピースミールな方法の使用によって乗り越えることができるという希望もでてくる 比較的単純

●私がユートピア工学の名の下に批判するのは、社会全体の改造、すなわちわれわれの経験に限ら

れているゆえにその実際の帰結が計算し難いような非常に広汎な変化を推奨するもの(161頁)

*理想を批判しているのではない

・一掃性、妥協のない徹底主義は唯美主義(完全という夢想)と関連(163頁)

唯美的徹底主義の批判

①自分自身とユートピア計画をも破壊しなければならない

②徹底主義につきまとう非合理主義の問題→社会の完全な改造が直ちに使いものになる体制を生むと

仮定することは合理的でない

→間違いを犯すことと改良によってのみ学ぶことができる(165頁)

第十章 開かれた社会とその敵

○幸福の観念 真の幸福は正義によって、すなわち自分の持ち場を守ることによってのみ達成される

→この正義だけがいやしくも真の幸福へ導くことのできる唯一のものであるということが、『国家』の主要

テーゼの一つ(169頁)

*プラトンは何が不都合かを知り、人々の苦勞のもとにある圧迫や不幸を理解していた(171頁)

●背景

呪術的ないし部族的ないし集団主義的な社会 閉ざされた社会

諸個人が個人的決定に直面する社会 開かれた社会

・閉ざされた社会はその成員が半生物学的なきずな一親戚関係、共同生活、共通の労苦や危険や喜び

や悩みを分け合うこと一によって結ばれている半有機体的統一

・人間は開かれた社会では満たすことのできない社会的欲求をもっている(173頁)

→閉ざされた社会から開かれた社会への移行 文明の圧迫が感じられた

・私は、われわれはこの圧迫を、知識や合理性、協同や相互援助、またその結果としてわれわれが生き

残る機会、人口規模などが増大するたびごとに支払うべき代価として耐えなければならない(175頁)

⇒プラトンがしたことは、開かれてしまった扉を閉め、社会に対して比類のない深さと豊かさをもつ魅力的

な哲学の呪文を投げかけてそれを押さえつけようとする努力であった(193頁)

●調和のとれた自然状態への復帰などというものはありえない。もしわれわれが引き返すならば、われ

われは道のり全部を行かなければならない—われわれは野獣に帰らなければならない…われわれは

野獣に帰ることはできる。だが人間であり続けたいと望むならば、そのときには唯一つの道、開かれた

社会への道があるのみである。われわれは安全および自由の両者のための良い計画を立てるために、

持ち合わせの理性を用いて、未知と不確定と不安定の中へ進み続けなければならない(195頁)

